

茨城県北芸術祭とその後のアート

-当事者たちへのインタビュー-

女子美術大学大学院博士前期課程美術研究科アートプロデュース研究領域
磯野玲奈

1. 研究目的

本研究の目的は、「KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭」（以下、県北芸術祭）を事例に、大規模芸術祭の効果やその必要性を検証することです。また、その検証を通して県北芸術祭とその後のアートの動向に光を当て、現在の活動についての記録を残そうとしています。

2019年からインタビュープロジェクトとして本研究を開始し、修了制作としてプロジェクトを報告する冊子を制作しました。このWEB展覧会では本研究のサマリーを展示します。

2. 研究背景

「KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭」

県北芸術祭は「海か？山か？芸術か？」をテーマに掲げ、茨城県の県北地域の6市町（北茨城市、高萩市、日立市、大子町、常陸大宮市、常陸太田市）を舞台に、2016年9月から11月にかけて開催された芸術祭です。総合ディレクターは南條史生さんが務めました。県北芸術祭総括報告書によると、来場者の76.8%が県内から訪れたそうです。これは他の芸術祭では見られない特徴で、県北芸術祭は地元の人からの関心が高かったことがわかります。しかしながら、2019年秋に開催予定だった第2回は県の方針が変わったことにより2019年3月に中止が決定しました。

「地域おこし協力隊」

地域おこし協力隊のは、総務省が行う「都市地域から過疎地域等の条件不利地域に移住して、地域ブランドや地盤産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組」です。隊員は各自治体からの委嘱を受けて、1～3年の活動をします。

県北芸術祭後、茨城県では地域おこし協力隊の制度でアート分野の隊員が活動を始めた。現在では県北芸術祭の流れを汲む形となっています。2018年から、地域おこし協力隊(アート分野)として2名のアーティストが常陸太田市にあるアートセンター「メゾン・ケンポク」(茨城県常陸太田市)の運営と、そこでの作品制作・発表を行なっています。(2021年2月現在)その他、県内では大子町、北茨城市でもアートの地域おこし協力隊がこれまでに活動してきました。

3. インタビュー

2019年から2021年にかけて、県北芸術祭とその後のアート関連事業・地域おこし協力隊にかかわった当事者（6名）へのインタビューを行いました。

岡野恵未子さん

インタビュー日：2019年6月13日と同年12月16日

岡野さんは2015～2017年に茨城県北芸術祭実行委員会の事務局に勤務されていました。インタビューでは県北芸術祭の運営の経験と、県北芸術祭後のコミュニティについての考えを伺いました。

冠那菜奈さん

インタビュー日：2019年7月1日

アートメディエーターとして活躍されている冠さんは、キュレトリアルアシスタントとして県北芸術祭に携わっていらっしゃいました。インタビューではキュレトリアルアシスタントから見た県北芸術祭についてインタビューしました。

松本美枝子さん

インタビュー日：2020年8月12日

写真家、美術家。県北芸術祭での作品展示を行い、2018年より茨城県の県北地域おこし協力隊に委嘱し、アートセンター「メゾン・ケンポク」を運営と、作品の制作・発表をしています。インタビューでは県央地域と県北地域における相互の影響や、県北芸術祭と地域おこし協力隊での活動について伺いました。

日坂奈央さん

インタビュー日：2020年12月26日

日坂さんは、松本さんと同様に2018年より茨城県北地域おこし協力隊として「メゾン・ケンポク」を拠点に服飾作品の制作・発表をしています。大学卒業後すぐに地域おこし協力隊として県北地域に移住した日坂さんに、若手アーティストにとっての地域おこし協力隊の活動について伺いました。

海野輝雄さん

インタビュー日：2021年1月8日

県北芸術祭ではボランティアに参加し、読書会や作品制作を行うなどする有志の「メゾン・ケンポクのチーム」のメンバーとして活動に参加されてきました。長年、茨城で美術を見てきた経験を伺うと、海野さんは街の中に芸術があると起きることについて話してくださいました。

菊池彩稀さん

インタビュー日：2020年12月23日

2017年8月から大子町地域おこし協力隊のアート担当となり、現代美術家の上原氏やDAIR（ダイヤ：大子アーティスト・イン・レジデンス）滞任アーティストの制作サポートや記録撮影、「大子まちなかアートウィーク」の企画、運営を行われてきました。地域おこし協力隊卒業後も大子町でアート関連活動を行っている菊池さんに、DAIRの運営についてと県北地域の地域おこし協力隊同士の連携について伺いました。

4. インタビューを終えての考察

県北芸術祭を支えたサポーターたちのコミュニティの課題

2019年夏、県北芸術祭のサポーターや参加アーティスト、その他茨城の美術関係者などがメンバーの交流の場として、Facebookのプライベートグループ「Meets KENPOKUのサロン」が立ち上がりました。しかしながら、現状では方々の展覧会やおすすめ記事の紹介といった内容投稿が並んでいる状況です。実際にサポーターたちと接した岡野さんと冠さんのインタビューで、会期中にサポーターたちにとって芸術祭が自分ごとになっていったことが話されました。それと同様に、現在のメゾン・ケンポクなどの活動をそれぞれに引き寄せて参加したいと思えるようなユーザーある仕組みが必要だとわかりました。

地域おこし協力隊と拠点の形成

今回は地域おこし協力隊の事務所「メゾン・ケンポク」が、県北地域のアートのハブとして機能し始め、地域の人たちとの読書会などの活動拠点となる他、「Meets KENPOKU アートミーティング」を通して、県北地域内外の地域おこし協力隊隊員と協力隊卒業後も地域に残り活動을続ける方々を繋ぐネットワークを構築しています。このことから、芸術祭実施により他地域からアートに関わる人材が流入し拠点（プラットフォーム）が形成されたことと、国の地域振興に対する制度との目的・成果が一致していることが分かり、これは県北芸術祭の効果の一部だと言えます。また、若手のアーティストにとって地域おこし協力隊は作品の制作・展示を通して地域の方々と交流し、活動の幅を広げる機会になっていることがわかりました。

一方で、県北地域でアートプロジェクトの現場をマネジメントできる人材が不足しているという課題が見えてきました。アーティストがマネジメントを兼業するのではなく、作品制作をするアーティストとマネジメントをするディレクターやコーディネーターが分業できると、県北地域のプラットフォームは更に充実するのではないのでしょうか。

芸術祭の真の効果

地域という生活の場で芸術作品の展示を行うことは、地域住民にとって日常と非日常を行き来する空間であり、それは人々の感受性への刺激や視点の変化といった目には見えない効果をもたらすことが、インタビューで話されたことから見えてきました。しかし、このような可視化しにくい効果をいかに伝え、評価に繋げられるかが現在の課題です。

このインタビュープロジェクトは今後も継続予定です。「茨城県北芸術祭とその後のアート - 当事者たちへのインタビュー-」が、今後の議論に微力でも力になれば幸いです。